

日本ヘーゲル学会

第35回研究大会

2024年6月8日(土)・9日(日)

ハイブリッド開催

会場：京都大学 吉田キャンパス本部構内

文学部校舎・第3講義室



要事前申し込み

*出席の方はこちらのQRコードより必ず事前申し込みをお願いします。〆切：6/5(水)

QRコードがうまくいかない場合は下記大河内までメールでご連絡ください。

*オンライン参加方法については別添のオンライン大会マニュアルをご参照ください。

開催校責任者：大河内泰樹(京都大学)

〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町

TEL 075-753-2743(大河内研究室) Email: okochi.taiju.3r@kyoto-u.ac.jp



日本ヘーゲル学会事務局

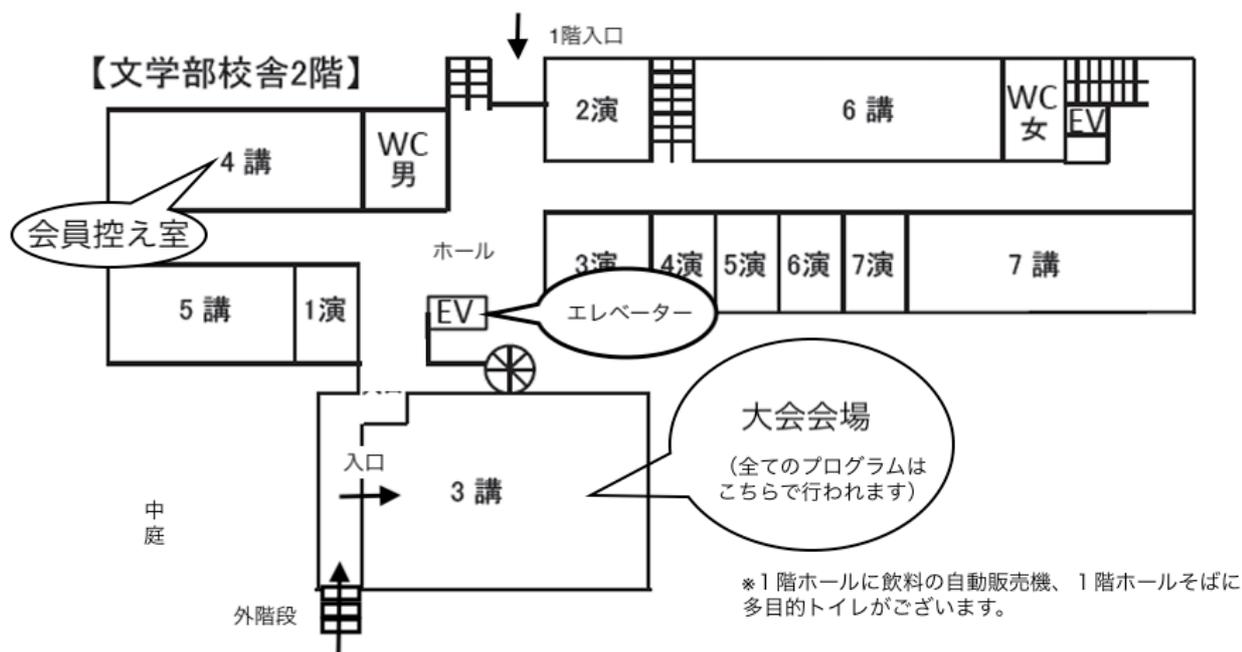
〒157-0066 東京都世田谷区成城6-1-20 成城大学文芸学部ヨーロッパ文化学科 下田研究室

TEL: 03-3482-9515 | E-Mail: hegel-jimukk@hegel.jp | 学会HP: <http://hegel.jp>

郵便振替口座: 00150-1-10718 日本ヘーゲル学会

【開催会場】

- (1) 個人研究発表・シンポジウム・合評会・講演・総会：
文学部校舎二階第3講義室（3講）
- (2) 会員控室：
文学部校舎二階第4講義室（4講）
- (3) 懇親会・昼食スペース 文学部校舎一階第1・2講義室（3講の真下）



*大会へのオンラインでのご参加は、学会 HP 上「第 35 回研究大会特設サイト」からお願いします。パスワードが必要です。詳細は「オンライン大会マニュアル」を併せてご覧ください。マニュアルは HP 上でも随時更新予定です。

【プログラム】6月8日（土）文学部校舎 第三講義室

● 10時30分～11時10分：個人研究発表（1）

トレンデレンブルクのヘーゲル批判

発表：木本周平（東京都立大学）、

司会：太田匡洋（沼津工業高等専門学校）

● 11時15分～11時55分：個人研究発表（2）

「現象学の論理」再考：フルダによるピンカード、ブランダム批判からの一考察

発表：久富峻介（京都大学）

司会：田端信廣（同志社大学）

休憩（12時00分～13時00分）

- 13時00分～13時45分：総会
- 13時45分～13時55分：研究奨励賞授与式
- 14時00分～17時00分：シンポジウム
間文化哲学的視点からの「ヘーゲルと日本哲学」——宗教、言語、弁証法をテーマに
提題者： 竹花洋佑（福岡大学）
フォンガロ・エンリコ（南山大学）
玉田龍太郎（滝川中学校・高等学校）
司会： 下田和宣（成城大学）
- 17時30分～19時00分：懇親会（文学部校舎一階第1・2講義室）

【プログラム】6月9日（日）文学部校舎 第三講義室

- 10時30分～12時00分：特別講演
松田（山崎）純（静岡大学）
ヘーゲル歴史哲学研究の新次元～大陸欧州の生命倫理学との関連にもふれて～
司会：神山伸弘（跡見学園女子大学）

休憩（12時00分～13時00分）

- 13時00分～16時00分：合評会
高田純『ヘーゲル承認論の射程一格差・分断の時代に抗して』（こぶし書房、2023年）
評者： 裕 智樹（広島大学）
片山善博（日本福祉大学）
赤石憲昭（日本福祉大学）
司会： 竹島あゆみ（岡山大学）

【要旨】

【個人研究発表1】

トレンデレンブルクのヘーゲル批判

木本周平（東京都立大学）

19世紀は論理学の歴史において、改革の時代である。そのさなかにあつて、トレンデレンブルクはヘーゲル論理学に対する19世紀最大の批判者として位置づけられるであろう。「最大の」というのは、様々な意味を含むが、少なくとも量的な点では疑いもなくそうである。彼の主著の一つである『論理学探求』（初版1840年；第二版1843年；第三版1870年）は「弁証法的方法」という章でヘーゲルの方法論についての長大な批判を展開している。この章は初版において既に70ページを越える分量があつたが、第三版に至るまでさらに分量を増大させており、批判の対象は方法論だけではなく、それ以外の各章における個別のトピックでヘーゲル批判を展開するのである。『論理学探求』における主要な批判対象はヘーゲル論理学だといってよい。当時の学問的状况において、トレンデレンブルクの影響力が大きかつたことは間違いないが、その一方でその批判の有効性がヘーゲル論理学の影響力低下にどれほど結びつていたのかは定かではない。トレンデレンブルクを量的な意味で「最大の」ヘーゲル論理学批判者と控えめに評価するのは、こうした事情のゆえである。

本発表で私はこのトレンデレンブルクのヘーゲル批判を紹介する。その目的はトレンデレンブルクの論点の中に現在でも考察に値するものがどれだけ含まれているのかを検証し、ヘーゲル批判としての有効性を評価することにある。このような検証はトレンデレンブルクがしばしば、相手の議論を批判する際に自分に固有の概念理解に訴えつつ難癖をつけるという傾向によって必要なものとなる。そのような難癖は少なくとも批判としては妥当ではないということになるだろう。とりわけトレンデレンブルクの運動概念は独自のものがあつて、それがヘーゲルに対する批判だけでなく『論理学探求』の様々な論点に影響を及ぼしている。こうした事情のために、トレンデレンブルクのヘーゲル批判はその検討のための準備的作業が必要な代物なのである。本稿では彼がしばしば繰り返す経験的な要素が論理的カテゴリーの導出に先立って前提されているとする批判を中心的に取り上げることにする。

以上の作業は、おそらくトレンデレンブルクによるヘーゲル論理学批判の価値を限定的なものとして評価することにつながると思われる。こうした結果は、トレンデレンブルクの批判があまり有効でもないにもかかわらず広く受け入れられたのはなぜかを説明する、知識社会学的な考察の必要性を明らかにすることに繋がるであろうと期待される。

【個人研究発表2】

「現象学の論理」再考：フルダによるピンカード、ブランダム批判からの一考察

久富峻介（京都大学）

1990年代以降の『精神現象学』研究では、多少の力点の違いはあれど、主に「自己意識」から「精神」までの実践的な議論に定位してヘーゲルをアクチュアライズさせようという試みがなされてきた。その代表例がT・ピンカードとR・ブランダムである。とはいえ、当然のことながら『精神現象学』には思弁哲学的なテーゼも含まれており、それらの方針に対してフルダは「絶対知」章の読解から彼らに異議を唱えていた。フルダによれば、ピンカードのような「共同的自己反省」を中心的な命題に据える理解では文化主義的・ヨーロッパ中心主義を脱することはできず、またブランダムのような推論主義は「論理学」という純粋な思考諸規定への移行というテーゼを受け容れていない限りで『精神現象学』解釈としては問題があるという。フルダの指摘は、近年の『精神現象学』解釈が間主観的实践の側面を強調する一方で、ヘーゲル哲学の思弁的・形而上学的な側面さえも通常の実践のうちに解消しようとする傾向が強いことを懸念していると言える。

本発表では、フルダの批判を承けて、昨今の『精神現象学』解釈が思弁哲学的な要素をどのように評価しているのかを踏まえつつ、その解釈上の射程を測るために改めて「現象学の論理」問題に取り組みたい。というのも、ピンカードらの解釈を評価するためには、「現象学」から「論理学」への移行がいかにして正当化されているのかをあらかじめ明らかにせねばならないからである。本発表では、近年の方針すべてを総括することはできないが、その評価の前提となる「現象学の論理」問題を「絶対知」章の「三つの規定性」と「想起」の体系上の機能に着目することで明らかにしたいと思う。それによって、フルダ自身の「絶対知」読解の問題点も示されるだろう。

【シンポジウム】

「間文化哲学的視点からの「ヘーゲルと日本哲学」——宗教、言語、弁証法をテーマに」

【趣意説明】

本シンポジウムは日本哲学におけるヘーゲル受容の展開を考察の対象とする。たしかに「日本哲学におけるヘーゲル受容」というとすでにかかなりの蓄積がある研究分野である。例えば日本ヘーゲル学会でもすでに2005年冬大会にて「ヘーゲルと京都学派」（『ヘーゲル哲学研究』第12号（2006年）掲載）と題されたシンポジウムが催されている。そこで明らかにされたように、西田幾多郎と田辺元の弁証法理解はヘーゲル哲学との対話のもとで豊かに形成されたのである。

もっともこの例に代表されるように、これまでは主に純度の高い哲学的議論へと研究の関心が集中してきたように思われる。そこで本シンポジウムでは「受容」という出来事が根ざす「文化的なもの」へと着目し、諸々の哲学が相互に接触・移入する現場（その典型が「翻訳」という作業である）に立ち会うことによって、「ヘーゲルと日本哲学」研究を別の仕方で展開することにしたい。「間文化哲学」的なこの試みは狭義の純粹哲学的な研究の枠組みを越えることになるだろう。かといってそれは哲学の議論をトリヴィアルな事柄に還元するものではなく、むしろ哲学という営みについての従来の（概ねヨーロッパ中心的な）理解に対する根底的な反省となりうるものだと言える（だとすれば本シンポジウムの関心は昨今の「世界哲学」の研究動向とも接続するものと位置づけられよう）。

以上の見通しのもと、本シンポジウムでは日本哲学と西洋哲学のどちらにも通暁されている以下の三名を招き、代表的な日本の哲学者のヘーゲル受容を取り上げる。田辺哲学の専門家であり、ヘーゲル哲学にも造詣の深い竹花洋佑氏には、キリスト教／浄土教の接触を軸に、田辺のヘーゲル受容を「宗教」の観点から論じていただく。対して、西田幾多郎の著作のイタリア語訳を精力的に行っておられるフォンガロ・エンリコ氏は、実際の翻訳現場から、ヘーゲル哲学と西田哲学がそれぞれ依拠している「言語」、すなわちドイツ語と日本語の差異を主題化される。最後に、フィヒテ研究、三木清研究で著名である玉田龍太郎氏には、三木哲学の転換期にあったヘーゲル哲学との対決をもとに、ヘーゲル的「Dialektik」と三木の「弁証法」の絡み合いに触れていただく。これらの提題を通じて、ヘーゲル哲学との接触が日本哲学にもたらしたものについて、ならびにまたその出会いにおいて生じたはずのヘーゲル哲学の文化的変容について考えてみたい。

【提題1】ヘーゲルと他力哲学——清沢満之から田辺元へ

竹花洋佑（福岡大学）

田辺元は近代日本哲学における最大の弁証法論者の一人であると言えるが、彼のいわゆる「絶対弁証法」とヘーゲルとの関係が議論となるとき、議論の焦点はもっぱら戦前の思想に置かれていた。『ヘーゲル哲学と弁証法』（1932年）や『哲学通論』（1933年）、そしてそれらに続く「種の論理」（1934年～）の時期が、田

辺の生涯においてもっとも集中的にヘーゲルと対決し、またそれとの関係で西田と“真の弁証法”をめぐる戦いをくり広げた時期であることを考えれば、もっともなことであろう。しかし、本発表では、「懺悔道」の立場以降の後期哲学における田辺のヘーゲル理解に焦点を当てることにする。

西田やハイデガーと同じく、ヘーゲルは田辺にとってアンビヴァレントな存在である。すなわち、自らの思想に決定的な影響を与え、その源泉であるにもかかわらず、いやそうであるからこそ、自らの立場から明確に引き離しておかなければならない存在がヘーゲルであった。戦前においてすでにヘーゲルはそうした哲学者であったが、そうした二面性の度合いは後期に至って一層強まったと言える。なぜなら、戦前の理論的行き詰まりの根拠がヘーゲルの理性主義な同一性の立場にあったと反省されながらも、他力的な「懺悔道」を具体的展開としての歴史主義の立場の体現者はヘーゲルであるとして高く評価されるからである。他力とヘーゲル、まったく無関係に思われる両者は田辺においてどのように結びついているのであろうか。

そのことを理解する手掛かりとして本発表では、清沢満之の哲学を取り上げる。清沢から田辺への直接的影響関係を捉えるためではなく、あくまでもヘーゲルと他力の立場の結合の田辺的あり方の特徴を浮かび上がらせるための補助線として、である。清沢がヘーゲルに影響を受けた他力の哲学者であることはもはや言うまでもない。ただ、清沢がヘーゲルの無限論をふまえて有限と無限の二項的論理を説くのに対し、田辺の場合には個と種と類の三項的論理を展開する。この種と名付けられる次元の意義を強調する点に田辺はヘーゲルとの親近性を見出しており、田辺のヘーゲル理解の特徴はまさにここにある。それが他力の立場とどのように結びついているかを明らかにするが本発表の課題である。これは、田辺理解という観点から言えば、後期田辺哲学における種の問題ということであり、同時に間文化的的な視点から見れば、田辺の目を通して、ヘーゲルと親鸞が重なり合う様を捉えることでもある。

【提題2】言語についての間文化的考察 - ヘーゲルと西田の間で

フォンガロ・エンリコ（南山大学）

西田がヘーゲル哲学と直接対峙した最初の著作である『私の立場から見たヘーゲルの弁証法』（西田幾多郎新全集第七巻 262-278 頁）の後書きとして付された有名な一節の中で西田は、「私の今日の考えが多くをヘーゲルから教へられ、又何人よりもヘーゲルに最も近いと考へると共に、私はヘーゲルに対して多くの云ふべきものを有つて居るのである。私から云へば、ヘーゲルの弁証法は尚主語的である、ノエマ的である。」(277 頁)と記している。1931 年以降、西田は何度もヘーゲルに立ち戻り、さまざま形で批判を展開するが、今回はそのうちのひとつに焦点を当てたい。この批判を間文化的に解釈しようとするならば、ヘーゲルと西田の哲学の主な違いは、両者が用いる言語の根本的な差異に基づくと考えることが可能である。ヘーゲルの弁証法が主語的であるのは、ヘーゲルがドイツ語、つまりインド・ヨーロッパ語を用いて書き、考えていることによる。ヘーゲル自身も『大論理学』第二版への序文では、哲学には中国語はあまり適切ではないと述べている。おそらく日本語でも同様であろう。そうだとすれば、ヘーゲルの弁証法的論理と西田の場所的論理の違いは、言語的な違いに帰結するものと考

えられる。間文化的アプローチによって、一方では、ヘーゲルがいまだ依存していると思われるヨーロッパ中心主義的偏見を解体できる可能性があり、他方では、ヨーロッパの経済的・政治的崩壊によって今日目前に迫っているように見える「オクシデンタリズム」の危険性を回避することも可能であるかもしれない。

【提題3】 転回期の三木清——ヘーゲル哲学との対話

玉田 龍太郎（滝川中学校・高等学校）

三木清（1897～1945年）は、若き日の新カント派哲学からの影響とドイツ留学時代の学究を通して、ヘーゲル哲学を受容した。しかしパリ生活を経て、帰国翌年に刊行した処女作『パスカルに於ける人間の研究』（1926年）の解釈学的見地からの取り組みや当時のマルクス主義思想への接近を経て、むしろ三木の著『歴史哲学』（1932年）はヘーゲル哲学への独自の対話的な視点からの吟味から立ち上がっていった。本発表では、『パスカル論』から『歴史哲学』に至るまでの三木の活動を顧慮しつつ、彼のヘーゲル解釈を考察したい。

レーヴィットによると、この時期ロシアにおいてヘーゲル主義は、ニヒリズム、マルクス主義、そしてレーニズムを通じて影響を持ち続けており、1931年にモスクワにおいてヘーゲル百年記念会議が催され、同年これと同様の会議がローマとベルリンにおいても開かれたが、これらの諸会議はヘーゲル哲学の活動的精神と論理的方法を共有しつつも、それぞれが異なる視点を持つに至っていた（PhB. 152.）。本発表では、これら各国の諸会議と軌を一にして、日本においても同年にヘーゲル哲学の研究が活況を呈したことに注目したい。実際、三木はこの研究動向の中心にいた哲学者の一人であった。

三木亡き後、船山信一は三木哲学の展開を四期に分けて考察し、「弁証法の立場から見て、『歴史哲学』が最も多く注意しなければならないものである」（船山 1995年、142頁）としたが、本発表ではこの『歴史哲学』執筆に費やされた1931年前後の時期を、船山の分類に沿って三木哲学前期・第一～二期から後期・第三～四期への大きな「転回期」とみたい。

また、唐木順三は『三木清』（1947年）の冒頭において、同時期の三木の論文「弁証法の存在論的解明」（1931年）を重視した。即ち、三木の設定した哲学的課題は「マルクスによって示された今日の現実の問題の哲学的基礎づけにあった」のであり、この課題は「哲学理論として、存在に対する存在の根拠の問題として提出され、考究された」が、しかし三木はこの論文においてヘーゲル哲学を論じる際に「ライブニッツを媒介として」考察しており、実際にこの課題が三木によって「如何に考えられたかを知る上に不可欠な資料」として論文「解明」が取り上げられねばならない（唐木 2002年、7～8頁）と。船山もこの論文を「第二期から第三期への過渡、又はむしろ第三期に属するものである」（船山 1995年、同頁）としており、転回期の三木の思索がヘーゲル哲学との対話を通してどのような仕方で成立していったかを、彼独自の視点の在処を探りつつ、究明していく。

【特別講演】

松田（山崎）純

「ヘーゲル歴史哲学研究の新次元～大陸欧州の生命倫理学との関連にもふれて～」

(1) 2020年にアカデミー版ヘーゲル全集の「世界史の哲学」講義録が刊行されたことにより、ヘーゲル歴史哲学研究は新たな段階を迎えた。これまでヘーゲル歴史哲学に対して、現状を完全なものとして正当化する未来不在の保守主義などの非難が繰り返されてきたが、その多くは旧全集版の『歴史哲学講義』の歪められた編集によるところが大きい。一般読者が講義録を読めるようになったいま、1822-31年の10年間の変化を歴史的な相のもとに捉え直さなければならない。人口に膾炙した誤解や非難を超えて、ヘーゲル歴史哲学の実像に迫ることが求められる。それによって、ヘーゲルが怠った次のことも見えてくる（拙著『ヘーゲル歴史哲学の実像に迫る』参照）。

- ・ヘーゲルは歴史性の哲学を深めなかった
- ・自由の歴史を法の歴史的展開として示さなかった。法の歴史的発展の中に国際法の展開も含まれるが、ヘーゲルは永遠平和を理想主義として無視した。
- ・ヘーゲルは自然状態を承認論で乗り越え、主権国家の確立を正当化したが、国家間の「第二の自然状態」をそのまま放置した（ヘーゲル承認論の中の大きな欠落）。

(2) ヘーゲルの自由論や近代認識との関係の中で大陸欧州の生命倫理学の特徴にも触れ、ヘーゲルの思索の現代的意義を考えてみたい。日本で生命倫理学と言うと、米国型のバイオエシックスが情報面でも主流であるが、大陸欧州の生命倫理学はそれとは異なる特徴を持っている。その主な特徴は次の3つである。(1) 4原則アプローチに対して尊厳・人権を重視、(2) 医療の目標と職業倫理を重視、(3) 自己決定権に対して、<関係のなかの医療>と連帯を重視

米国生命倫理学の4原則（自律尊重、無危害、善行、正義）に対して、大陸欧州の生命倫理学は自律尊重、人間の尊厳、心身統合性（integrity 不可侵性）、傷つきやすさ（vulnerability 脆弱性）の4原則を掲げる（バルセロナ宣言 1998年）。「私たちは、たとえ自律的なものであっても、みな傷つきやすい」、「人間は自由にして依存的な存在」という人間像から、他者への配慮(ケア)の文脈のなかで、傷つきやすさへの連帯を重視する。アトミズム的な自己決定権を自信過剰に主張しても自己決定は実現できない。傷つきやすい者への連帯という社会的関係の中で自己決定の実現を目指す。こうした発想は、ヘーゲル的な存在論・人間学からは違和感なく理解できる。大陸欧州の生命倫理学の特徴とヘーゲル歴史哲学最終講義のリベラリズムとアトミズム批判との関係についても考察してみたい。

【合評会：高田純『ヘーゲル承認論の射程 格差・分断の時代に抗して』自著紹介

本書は三〇年前の著書『承認と自由——ヘーゲル実践哲学の再構成』（一九九四年）の継承であるが、これと比較してつぎのような特徴をもつ。

1 今日一方で社会的な格差、差別、排除、孤立化の強まりを背景に、承認の問題への関心が高まり、多様性の承認（文化、ライフスタイルなどの面での）が話題になり、また福祉、連帯と承認の関係が注目されている。しかし、他方で承認の欲望の肥大化にたいする批判も強まっている。ここでは真の承認とはなにかがあらためて問われている。

2 ヘーゲルは承認の基本構造を「他者における自分直観」に見出し、この構造をもつさまざまな社会関係を承認の実現と捉えており、本書でも彼の把握の深さと広さを確認した。しかし、従来の研究では、承認を価値意識（評価）の面から狭く捉える傾向が根強い。ヘーゲルは法的、道徳的な承認に対して人倫的承認を重視するが、これは実質的なものであり、個人相互の協力、支援のなかでその担い手として自他を扱うことにある。この承認は価値意識を伴うが、これによって成立するのではない。

3 『精神現象学』の自己意識の章における承認論の展開をたどり、これを図式化した。この展開は承認の構造（「承認の概念」）、承認の闘争（「承認の運動」）、その一面的解決としての支配・隷属の関係という過程をたどる。従来は第二、三の段階が注目されたが、基本的なのは第一の段階であり、そこでは承認の構造が弁証法に解明される。理性の章と精神の章では承認の社会的実現が考察される。さらに、和解と関連してさまざまな人間関係における承認が扱われ、宗教における人間と神の承認関係にも言及される。

4 『法哲学』における承認論をより詳細に考察した。イエナ期には承認が実践哲学の基本におかれるが、後期には背景に退くという解釈が多いが、内容的には後期においてむしろ発展、充実される。とくに「普遍的資産」の形成と分配という視点から市民社会の正当性が問われている。このことは今日の市場経済のあり方を検討する上で、示唆を与えるであろう。

5 ヘーゲル承認論の解釈の二人の代表についてコメントした。コジェーヴによる解釈は独創的であるが、今日でも影響が強く、バトラーにも及んでいる。ホーネットはイエナ期の承認論の研究に続いて、『法哲学』における承認論の研究に向かい、権利、尊厳の尊重、承認のほかに「特殊性の配慮」（各人の特有の生活上のニーズの配慮）に着目している。

【会場校アクセス】

* 京都大学のアクセス情報はこちらにもあります。 <https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access>
京都駅から京都大学吉田キャンパス本部構内へのアクセス（所要時間は交通状況によります）

○JR・近鉄「京都」駅から

- ・タクシー（20分程度）
- ・バス 乗車バス停:「京都駅」 → 降車バス停:「京大正門前」または「百万遍」〈所要時間:約35分〉
 - 市バス206系統「三十三間堂 清水寺 祇園・北大路バスターミナル行き」（バス停D2）
 - 市バス17系統「四条河原町・銀閣寺行き」（バス停A2）
- ・電車を利用する方法

京都市営地下鉄烏丸線「京都」駅から「今出川」駅〈所要時間:約10分〉 → バス停「烏丸今出川」から市バス201系統、203系統、102系統を利用し、バス停「百万遍」下車〈所要時間:約10分〉 → バス停「百万遍」から徒歩約5分

○阪急「河原町」駅から

- 乗車バス停:「四条河原町」 → 降車バス停:「京大正門前」または「百万遍」 〈所要時間:約25分〉
- ・市バス201系統「祇園・百万遍行き」
 - ・市バス31系統・市バス3系統・市バス17系統

○地下鉄烏丸線「今出川」駅から

- 乗車バス停:「烏丸今出川」 → 降車バス停:「京大正門前」または「百万遍」 〈所要時間:約15分〉
- ・市バス201系統「出町柳駅 百万遍・祇園行き」
 - ・市バス203系統「出町柳駅 銀閣寺・錦林車庫行き」
 - ・洛バス(市バス102系統)「[急行]出町柳駅・銀閣寺・錦林車庫行き」

○京阪「出町柳」駅から

東へ徒歩約20分

○京大病院ライナー[hoop]

乗車バス停:「京都駅八条口」 → 降車バス停:「京都大学前」〈所要時間:約26分〉 乗車バス停:「四条河原町」 → 降車バス停:「京都大学前」〈所要時間:約13分〉

京都駅バス停案内図



京都大学 吉田キャンパス マップ



■大会会場（文学部校舎第三講義室）

文学部校舎の建物（地図上の8）と連結している南側の四角い建物の二階です。8の建物の中を通ることもできますが、西側の中庭階段から直接アプローチした方がわかりやすいと思います。

■昼食について

- ・カフェテリアルネ（土曜日のみ営業：マップ参照）
- ・コンビニ（百万遍交差点付近にセブンイレブンとローソンがあります）
- ・百万遍交差点周辺、今出川通北側、東一条通に飲食店がございます。

*ご持参・購入されたご昼食は、**会員控室**（第7講義室）**昼食スペース**（第1・2講義室）でおとりいただけます。

■懇親会（6/8（土）大会終了後）

会場：大会会場の真下の第1・2講義室で行います。

*懇親会参加ご希望の方は、かならず事前登録/事前振込をお願いいたします。

会費： 一般: 3000 学生: 2000

振込口座 ゆうちょ銀行 10160-56714781 オオコウチタイジュ

（他金融機関からの振込の場合） ゆうちょ銀行（9900） 店名：〇一八（ゼロイチハチ）

普通預金 5671478

*事前登録は本紙表紙のQRコードかEメール(okochi.taiju.3r@kyoto-u.ac.jp)にて